

「縁結び」に見る民間信仰の現代的流行

——流行神の展開とその要因の考察——

村 田 典 生

はじめに

東京都千代田区、ＪＲ飯田橋駅の近くに東京大神宮がある。伊勢神宮の東京における遙拝殿として創建された「東京のお伊勢さま」^①なのだが、ここ数年は「縁結びのパワースポット」とよばれて女性の人気を集めている。特に今年の正月は凄まじい数の参拝者が訪れ、連日社殿から延々と行列ができるほどである。まさしくハヤツている状態にある神であり、「パワースポット」という現代用語ともいべき言葉で語られてはいるが、平成二二（二〇一〇）年の庶民の熱烈な信仰を受けている流行神^{はやりがみ}ということができよう。

本論ではこの東京大神宮をはじめ、同じく東京にある今戸神社、石川県羽咋市にある気多大社、京都郊外の亀岡市にある出雲大神宮や他の縁結びに利生があるとされる神社を事例として婚活や恋愛成就という利生を持ち、結婚願望の強い特に女性に支持されている神社の流行の展開を検証する。

まず、この現代の流行神の展開を詳細に検討するにあたり、それぞれの神社を訪問し現況の把握に努めた。神職や神社近くに住んでいる方からの聞き書きを中心にして、祭神及び参拝の順序や方法等を調査した。なかでも絵馬の奉納に関して参拝した女性達が祈願の内容を明確に表現していると考え、一項をたてて絵馬についても分析を行

った。こうして現代の女性の結婚観や恋愛観を導きだしたうえで、各種リサーチ会社のアンケート等の活用と実際に各世代の女性からの聞き書きによって、カミに縁結びを祈願する女性たちの思いが現代の世相を通して見えてくるのではと考えたのである。

その過程で近世から存在する流行神にも簡単に触れてみたい。民間信仰における流行神の潮流が確認できるのではなからうか。

それぞれの時代に示現する神仏の流行りという現象が日本人の生活や心情とどのように関わっているのかを探る一助となるように、今回は「縁結びという利生」を持つカミに特化して考察する。縁を結ぶカミの現代的流行という現象の展開過程を検討すると共に、その流行の背景にあるカミの示現の要因を考察したい。

第一章 東京大神宮とその流行 第一節 東京大神宮

東京大神宮【写真1】は『全国神社名鑑 へ上巻』⁽²⁾によると「神宮司庁東京出張所として、明治初年日比谷に設けられ、明治天皇の勅裁を仰いで伊勢神宮の分霊を奉斎した。」とある。明治二三（一八八〇）年に社殿が完成し日比谷大神宮と称されていたという⁽³⁾。後に関東大震災で火災にあって焼失し、昭和三（一九二八）年に現在地である飯田橋に遷座したとのことである。当時は飯田橋大神宮という通称で呼ばれていたが、昭和二一（一九四六）年正式名称として東京大神宮となった。

以上の経緯から前述のように「東京のお伊勢さま」と呼ばれており、その



【写真1】初詣で賑わう東京大神宮

伊勢から分霊した天照大神と豊受大神及び倭比賣命、そして造化の三神といわれる天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神が祭神として祀られている⁽⁴⁾。明治の神道政策の帝都における中枢として創建されたといっても過言ではないのである。

さて、その東京大神宮はそのパンフレットに「東京大神宮は」として巻頭に箇条書きで四つの特色を掲載している。一番目は繰り返しになるが、「伊勢神宮の神々を祀る東京のお伊勢さま」ある。二番目が「日本で最初の神前結婚式を行った神社」、三番目が「造化の三神も祀られている縁結びの神さま」、最後が「格式ある東京五社のひとつ」という順である。

この二番目と三番目の項が現在の東京大神宮のハヤリを顕現せしめる最大の要素となっている。そこでこの二つの項目を順に検証してみよう。まずは二番目の項目、「日本で最初の神前結婚式を行った神社」ということであるが、『全国神社名鑑へ上巻』の東京大神宮の項にも「事業」として「神前結婚式場⁽⁵⁾」として挙げられているように、本殿脇に式場が併設されている。現在では一般にも多く挙行されている神社神前結婚式はこの東京大神宮で明治期に創作され広まっていったものなのである。

第二節 神前結婚式と縁結び

平成一七（二〇〇五）年一月に京都女子大学・京都女子短期大学部図書館で開催された特別展観へ儀礼文化「婚礼物語」―家の慶びから個人の悲しみまで―の『図録⁽⁶⁾』によると、明治三三（一九〇〇）年五月十日に当時の東宮殿下、後の大正天皇は九条節子との婚姻にあたり、その「御成婚の儀を始めて宮中賢所の大前で執行された⁽⁷⁾」ということである。そしてこの婚儀が神式であつたということで「強い関心を国民の間に呼び⁽⁸⁾」、この形を東京大神宮において一般に「具現化した」ものがこの神社神前結婚式なのである。そして明治三四（一九〇一）年三月

三日にこのスタイルで初めて神前結婚式が挙行されたのである。これは当時としては画期的な結婚式の形であり「ハイカラでモダンな新文化」⁽¹⁰⁾と話題を呼んだようである。

このような沿革を辿ってきた東京大神宮はこの『図録』をして「神前結婚界のリーダー」⁽¹¹⁾と言わしめているように、近年盛んに喧伝されているような男女の出会いを演出する「縁結び」の神社というよりも、明治中期以降、男女が夫婦になるという「縁」を結ぶという結婚式を創出した神社なのである。

次に三番目の項目、「造化の三神も祀られている縁結びの神さま」ということであるが、この東京大神宮がそもそも明治になって建立された帝都における伊勢遙拝殿であったということに注目しなくてはならない。そのために伊勢の内宮・外宮の両宮から天照大神、豊受大神を分霊し、さらに併せて「造化三神」とよばれる神々も祀られている。明治の国家神道の中心的施設のひとつであったのである。

では何故この「造化三神」をもって縁結びの利生を説くのであろうか。それは『古事記』⁽¹²⁾にある一文と、それをもとにした江戸時代の国学者達の研究の成果をふまえてのものとみられる。

その『古事記』では冒頭に「天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神。次高御産巢日神。次神産巢日神。此三柱神者、並獨神成坐而、隱身也。」⁽¹³⁾とある。この三神を撰者の太安万侶は『古事記』の序において「參神作造化之首」⁽¹⁴⁾と紹介している。このことからこの三神は神社の言うように一般的に「造化三神」と呼ばれているのである。

この三神は神社入口に掲出されている由緒札やパンフレットの御神徳の項によると「天地万物の生成化育つまり結びの働きを司る造化の三神」と記載されている。この根拠は江戸時代に平田篤胤や本居宣長ら国学者の研究から導きだされたようである。『日本の神々の事典 神道祭祀と八百万の神々』⁽¹⁵⁾によると、天之御中主神は平田によって「天地万物大元主宰の神」⁽¹⁶⁾とされ、他の二神は本居によって「万物を生成する「むすひ」の働きをつかさどる

神^①」であるとされている。このことが根拠となっているようである。

さらに由緒札やパンフレットには「近年縁結びにご利益のある神社としてもしられ」るようになったとある。つまり、この文章から「縁結び」の利生が知られるようになったのは「近年」であるということが浮かび上がったのである。

東京大神宮は前節で述べた巻頭四ヶ条の上から三項目を順番として、その役割や利生を拡大させてきたことが確認できる。即ち建立当初は伊勢の遙拝殿としての国家神道の施設であったものが、皇太子時代の大正天皇の婚礼によって神前結婚式というスタイルを創出し、やがては縁結びの神社というように時代の要請に依って明治から平成の一三〇年を渡ってきたのである。そしてここ数年は創設当初の理念からはおそらく考えられない理由での流行の神となったのである。

第三節 東京大神宮のハヤリの現況

さて、平成二三（二〇一一）年一月三日、東京大神宮は初詣の参拝者が長蛇の列をなしていた。東京大神宮の付近は大学や高校が多く、学生街と雑居ビル、マンションが混在する皇居のお堀の内側にある古い街である。周囲の環境からして少し場違いな雰囲気の下にこの神社は存在し、そこに「大量のお嬢さん達^②」が行列をなして参拝していたのである。午前一一時三〇分で最後尾から拝殿までの所要時間は警備員の話しでは二時間半から三時間、賽銭箱からの距離およそ四〇〇メートルであった。筆者の見た目には独身女性と思われる方の姿が圧倒的に多数であった。

平成二二（二〇一〇）年七月一九日にお会いした東京大神宮の権宮司松山氏は「私はこの神社の息子ですが、子供の頃は正月に境内で凧揚げができるぐらい人はいませんでしたよ。」とおっしゃっていた。いつ頃から参拝の人

が増えたと実感したかという質問には「やはりここ数年ですかね。」とのことであつた。松山氏の年齢を三〇代前半とすると、昭和六〇年代においては正月といえどもほとんど参拝者がいなかったということになる。

また、月参しているという四〇代未婚女性の〇さんは平成二二（二〇一〇）年一月一四日のメールで「私は二一世紀になってから通つてますが、急激に増えたと感じたのは二〇〇八年一月だったかな。読売新聞に婚活の特集が載つてからかと。今年（平成二二年 注・筆者挿入）は一月三日に初詣に行きましたが、過去十年近く通つて一番待ちました。」と連絡があつた。彼女は三重県出身で現在は東京在住である。なぜ月参するのかという質問に対しては「三重県だからさ。」との回答であつた。本人にとつて職場近くの郷里との繋がりを感じさせる場所、お伊勢さんということで参拝を続けているとのことである。

このほか一月九日には「異常な数の行列」、一月十三日には「若い女子が行列を作っていた。」とそれぞれ東京大神宮へ行った方は話していた。九日と十三日は別々の男性の感想である。

筆者は権宮司と会つた七月一九日とその後一月六日そして本節冒頭のようにその次年一月三日と三度訪問した。七月の時は夏休みに入つてすぐの梅雨明け直後の快晴の真夏日だったこともあり、午前中で二十代から三十代の女性が続々と参拝に訪れていた。

境内では写真撮影のため白無垢の花嫁が結婚式場から出てきており、その姿を見かけた権宮司は「せっかくお参りに来ていただいたので神様とも縁を結んでいただき、実際に良縁が成就した時にはまたうちで結婚式もあげてもらえれば。」と話しておられた。「これだけ若い方がお参りにきていただけになったので、これを機会に神社のことを知つてもらおうと若手の神職で様々な知恵を出し合つて」いるそうで、一例として手水や儀礼の作法を図入りで著した「東京大神宮参拝のしおり」の作成、配布や伊勢の神宮ということで伊勢名物赤福の境内での頒布、涼を呼ぶためのミストシャワーの設置等を挙げておられる。都会の真ん中にこんもりとした森がある神社で「ゆっ

たりと過ごしながら、心身の緊張をほぐしましょう。」と「参拝のしおり」には書かれている。参拝後は境内に留まりくつろいだ時間までも演出するという、女性達の「癒し」までも引き受ける神社なのである。

二度目に訪れた十一月はやはり晴天の小春日和でこの時は午後訪問した。七月と同様に女性の参拝が多かったのだが、七月に比べカップルや親子（母と娘）連れの姿も目立った。また、明らかに結婚して二〇年近かつ「おばさん」のグループが観光バス三台の団体観光客の姿となって参拝していた。東京大神宮の認知度が上昇し、観光地化する様相が確認できるのである。

ところでこの東京大神宮のことを首都圏を中心とする友人、知人にインタビューしているともう一件の神社の名が複数の人物から挙がった。次章ではそうしたいいくつかの縁結びの神社を事例として検証してみることとする。

第二章 流行る縁結びの神様 第一節 今戸神社

今戸神社【写真2】は東京都台東区にある神社である。浅草から隅田川西岸を上流へ徒歩十五分ほど北にある下町の神社である。すぐ東に隅田川が流れ、対岸には東京スカイツリーの威容が現出している。そんな下町に今戸神社はある。この今戸神社もまた最近縁結びの神社として急激に人気を獲得した神社である。前述の〇さんから「ところで今戸神社は知ってますか？」という連絡を含め、複数の方から今戸神社の名前を聞いたのである。

今戸神社の由緒書によれば、祭神は応神天皇、伊弉諾尊、伊弉冉尊、福祿寿ということである。これによると、源頼義が安倍貞任討伐の時に京都の岩



【写真2】今戸神社

清水八幡を鎌倉と浅草今之津村（現在の今戸）に勧請したのが始まりとされている。元々は八幡だったのである。永らく今之津八幡と称していたようだが、昭和一二（一九三七）隣町の白山神社と合祀し、現在の今戸神社となった。この時に白山神社に祀られていた伊弉諾尊、伊弉冉尊、菊理媛神を合祀している。この祭神をして、現在の今戸神社が自らを縁結びの神社とする根拠となっているのである。

鳥居の前には「えんむすび 今戸神社」と二体の招き猫が描かれ、その下に「招き猫発祥の地」の看板もある。本殿にも招き猫の一メートル大の二体の招き猫の焼き物が据えられ、絵馬も招き猫である。しかし、神社と招き猫の関連は由緒書にはない。

平成二二（二〇一〇）年一月六日に訪問した時は大勢の二〇～三〇代の女性が群参し、列をなして参拝していたのである。絵馬掛けには大量の円形の絵馬が鈴なりであった。社務所玄関には無数の招き猫が奉納されており、玄関では招き猫がモチーフの創作体操のビデオが流されていた。また、本殿前にはかわいらしい招き猫の石像が建立されている。石像の前には札が建てられており、携帯電話で写真にとってその待ち受け画面にすればいいことがあるかもしれないというような文言が書かれている。女性たちはビデオをみて笑い、嬉々として石像を待ち受け画面に取り込んでいたのである。一種の恋愛のテーマパークのような様相であった。参拝後はすぐ脇にある社務所はお気に入りのお守りを購入する女性達で活況を呈していた。

この「招き猫発祥の地」というのは現在唯一軒残る今戸焼という焼き物に由来している。このあたりは江戸時代より隅田川の土手の土を用いて瓦を焼いており、当時は二〇件ほどが瓦を焼き、その合間に職人が趣向をこらした土人形を焼いていたのである。その一軒で片手を挙げる猫の焼き物が焼かれ、それが招き猫の発祥とされているのである。この地域で焼かれていた滅亡寸前の焼き物を招き猫を象徴として氏神である神社において知らしめさせる意図があったとのことである。⁽²¹⁾

窯元で絵付けをしておられた七〇代とおぼしき女性は「最近縁結びの神社といって大勢きているけど、私ら知らないうちに縁結びの神様になっていた。」という旨のお話をされていた。⁽²²⁾

〇さんの同僚に浅草で生まれ育った方がおられ、その方もそれまで今戸神社のことを名前くらいしか知らなかったという発言をしておられたという。⁽²³⁾ 先ほどの今戸焼の窯元の女性の話とあわせて考えると、地元の神社が実は地元に住む人々が知らない間にその神社がいつの間にか特定の利生により、この場合は縁結びというよりもむしろ恋愛成就というほうが近いのであるが、有名になってしまっていることが浮かび上がってきたのである。

第二節 気多大社

気多大社【写真3】は正式には気多神社といい、気多大神宮とも称される。⁽²⁴⁾ 本論では現在同神社が気多大社を名乗っていることから、気多大社の名で統一して表記する。

この気多大社は石川県羽咋市に鎮座している。羽咋は能登半島の付け根の辺り西海岸にあり日本海に面している町である。この町に鎮座する気多大社は天平時代にはすでに文献に登場する⁽²⁵⁾という歴史のある神社である。祭神は本殿に大己貴命、摂社に事代主命他、奥宮に素戔嗚尊、櫛稲田姫命である。この気多大社も近年縁結びの社としてクローズアップされているのである。

これは主祭神大己貴命が大国主神のことであるがため、出雲大社と同様に縁結びとされているのであろうことが推測できる。気多大社には主神が縁結びである旨は書かれてはない。ただ、毎月一日を「ついたち結び」と呼び



【写真3】石川県の気多大社

平成二二（二〇一〇）年七月二日に訪問した際の、亀岡市観光協会の話しでは最近参拝の女性が増していることである⁽³²⁾。また、同日出雲大神宮の権禰宜片岡氏の話によると、同年四月に発売された『月刊SAVVY』（以下サビイ）⁽³³⁾ 六月号の表紙を飾ったことで、発売後の参拝者数が五〜六倍に増えたとのことである。

この時の同誌の巻頭特集は「完全保存版 関西のパワースポット」というもので、二〇代の女性モデルが出雲大神宮を訪問する様が写真で紹介されている。片岡氏は「パワースポットと呼ばれてはいるけれど、霊験あらたかという言葉と同じだと考えている。」とおっしゃっておられ、ブームを肯定的にとらえていることが窺える。また、サビイの記事においても正しい参拝の仕方が掲載されており、流行を機会として参拝を通して「神社」や「神さま」と若年女性との接点を模索する動きという点で通底するものがあると考えられる。

また、毎月第四日曜を「えんむすびまつり」⁽³⁵⁾として正式な神社の祭礼を執行しており、最近では八〇名近くの女性に参加しているとのことである。真剣に参加している女性が多いとのこと、参加者はその後も熱心に参拝する傾向にあるという。片岡氏自身も出雲大神宮に熱心に参拝していた女性と結婚したということもあり、『サビイ』にも「縁結び祈願のためにこちらへ通い参拝されていた女性と結婚。身をもって縁結びを体現された。」⁽³⁶⁾と紹介されている。こうした事実が参拝の女性達にとって一種の奇跡体験となつて蓄積され、メディアに露出することによつてさらなる流行の喧伝になつているという点もまた見逃してはならないことであろう。

筆者の感想としてはこれまで事例としてきた四社のなかでは最も神秘的な雰囲気を感じられた。参拝の女性達にも今戸神社のようなテーマパーク感覚は無いように感じられた。片岡氏の話しても本殿裏にある巨石の磐座も最近までは触れることを黙認していたのだが、長時間に亘つて抱きついて動かない女性や磐座を削る人も現れたことから注連縄を張つて接触を禁じたとのことである。そのこと自体は決して容認されることではないが、そのような行為に及んでしまうほどの切迫感を高揚させる雰囲気である。

もうひとつ他の事例神社と違ったのは絵馬である。出雲大神宮以外は三社とも境内には絵馬が鈴なりであったのに対し、ここは絵馬の数が極端に少なかったのである。そしてその絵馬に書かれている内容が今戸や気多よりもシビアであるように思われるのである。この絵馬の内容については章を改めて、この事例四社だけでなく、京都において縁結びの利生を持つ神社をピックアップして奉納されている絵馬の内容を検証する。

第三章 流行神への群参

第一節 流行神の展開

前章においては東京大神宮の他に現在流行しているとされる縁結びの神社の現況を紹介した。本章ではこれらをもとにして参拝者の行動や心象を検討してみたい。

事例とした四社、東京大神宮、今戸神社、気多大社そして出雲大神宮といずれも活況を呈しており、「流行っている」と表現して問題ないであろう。これらの神社は東京大神宮を除き、他の神社は社伝において大変古い由緒を誇っており、いずれも天孫系の神を祭神として祀っている。東京大神宮にしてもその由緒は既述のように明治の国家神道の中核という側面を持っている。それが現在では縁結びを利生としているがために、各々が若いもしくは独身の女性の参拝がその中核をなしているといつて過言ではない。それほど彼女達の存在は神域において突出しているのである。

これら事例四社にこうした女性達が群参する一因として挙げられるのが「パワースポット」なる奇妙な言葉である。何れもがここ一、二年のうちにメディアによって取り上げられたケースが多い。この現代用語にはおそらく学術的な定義はなされていないと思われるのであるが、平成二二年の十一月現在ではメディアから波及して頻繁に使用されており、筆者の周囲でもよく耳にする言葉である。こうした曖昧な言葉で紹介されている四社ではあるが、

神職をはじめ神社側の人々、中でも若い世代において肯定的に捉えているといつてよい。

それは既述のとおり、東京大神宮の松山氏や出雲大神宮の片岡氏の言質からも首肯できよう。彼らはそれぞれ権宮司、権禰宜という立場であつたが、両社において次代を支えていく当事者としてチャンスと捉えているといつてよいであろう。それは神社の本分として神威の拡大であり、主たる参拝者である若年女性に伝道する教導的な活動の場である。そして、神社運営の活性化であり、健全化ということも当然のことながら顕在する。このようにいわば特需を生み出す縁結びを前面に押し出して、あえてそれに特化するような面も見受けられるのである。

また、一度だけの参拝だけではなく複数回数の参拝を促しているのも事実である。その意味で古くからある「御礼参り」はもちろんのこと、東京大神宮では現在の参拝女性をターゲットにした講演会の開催や、先述のように出雲大神宮では「えんむすびまつり」や気多大社では毎月一日の「心むすびまつり」を祭礼として挙行している。

「えんむすびまつり」では昼食が参加者に饗されるのであるが、出雲大神宮には今後男性の参加も呼びかけるという構想もあるようである。⁽³⁸⁾

このように縁結びを利生として流行とその持続を神社は意図しているのであるが、過去に流行った社寺においてはどうか。本論が流行神の展開過程を考察するうえでこの比較は必要である。その典型的な事例としては京都市山科区にある山科妙見が推挙できる。山科妙見は享保期に眼疾のおそらく百日法華の人物が日親上人の夢告で参籠、平癒したことが流行のきっかけであつたのだが、眼病平癒はやがて諸病一切の平癒に利生を展開させ、やがては「見大北妙一心」と刻された柿の木の神宝の示現や夜国美人像なる像を持ち出し話題を提供し流行を維持させた。他の事例としては幕末の京都において「虫封じ」で群衆を集めた三宅八幡宮や明治大正期では鎌倉の銭洗弁天の「金運向上」が上げられる。

東京大神宮も明治創設以来、第二次大戦後は参拝者の減少した時期を「日本最初の神前結婚式を挙行した」神社

という由緒から挙式神社として運営の礎を固め、そこから縁結びという利生に昇華させ、境内に癒しの空間を作り、お守りのバリエーションを増やすなどして女性達をターゲットとして流行の維持を意図している。利生の変化と新趣向を活用という点では享保期以降の事例との共通性を確認できるのではないだろうか。

さらに、身近な奇跡体験の喧伝というのも重要なファクターとして考えられる。筆者自身が東京大神宮参拝者から聞いた「四人で行って去年一人結婚した³⁹⁾」という話や、出雲大神宮では権禰宜片岡氏が参拝女性と結婚した話しが雑誌に掲載されたことなどはその最たるものといえる。こうした参拝者にとつての奇跡ともとられるような現象の示現、即ち奇跡体験は社寺へフィードバックされてさらなる参拝者の群参を喚起するのである。事例神社ではないが、京都市東山区の地主神社では本殿を囲う塀という塀に「縁結び御礼」の奉納半紙が貼り付けられている。つまり、成功事例の情報が開示されているのである。また、京都市中京区の金運上昇で流行っている御金神社はその流行の発端として「(宝くじで)三億円あたりました。神様ありがとう、ありがとう。」と書かれた絵馬の存在が挙げられる。山科妙見でも眼病が「たちまちに癒ゆ」ということがその発端が喧伝されたのである。

身近な奇跡とそのフィードバックが新たな群参を呼び、その中から示現した奇跡がまたフィードバックされて昇華して流行が形作られていくと考えられる。

第二節 群参する女子たち

前節では神社側の視点で流行神の展開を分析した。本節ではその神社に群参する人々のプロファイリングについての検討を試みる。結果から述べると「女子」達が群参しているということが挙げられる。本節では東京大神宮へ大挙押し寄せる妙齡の女性達を彼女達自身の特有の呼び方で以下「女子⁴⁰⁾」達と呼ぶことにする。

一月と七月、一一月に筆者の友人知人にケータイメールで東京大神宮を知っているか、参拝したことはあるかと

【表1】東京大神宮の知名度

番号	居住地	エリア	名前	性別	年齢	既婚未婚	知ってる?	参拝した?
1	東京	関東	K	M	50代	既婚	○	×
2	東京		S	M	40代	未婚	×	×
3	東京		K F	F	30代	未婚	○	○
4	東京		H	F	40代	既婚	○	○
5	東京		N	M	40代	既婚	×	×
6	東京		NW	F	30代	既婚	×	×
7	東京		H F	F	40代	未婚	○	○
8	東京		IK	F	30代	未婚	×	×
9	神奈川		T	M	50代	既婚	×	×
10	神奈川		TW	F	40代	既婚	○	×
11	千葉		O	F	40代	未婚	○	○
12	千葉		YG	F	30代	未婚	○	○
13	栃木		II	M	30代	未婚	○	×
14	愛知	東海	YS	F	40代	未婚	×	×
15	愛知		AK	M	20代	未婚	×	
16	愛知		U	M	40代	既婚	×	×
17	愛知		UD	F	20代	未婚	×	×
18	静岡		SK	F	40代	未婚	○	×
19	静岡		SKF1	F	30代	未婚	○	○
20	静岡		SKF2	F	30代	未婚	×	×
21	静岡		SKF3	F	30代	未婚	×	×
22	京都	近畿	A	F	40代	既婚	×	×
23	京都		H A	F	40代	既婚	×	×
24	京都		H I	F	30代	離婚	×	×
25	京都		K R	F	30代	既婚	×	×
26	京都		M	F	20代	未婚	×	×
27	京都		NN	F	20代	未婚	×	×
28	京都		NA	F	10代	未婚	×	×
29	福岡	九州	MT	F	30代	未婚	×	×

その後
の参拝
の参拝

いう二項目についてアンケートを行った。その回答集積が【表1】である。母数は少ないながら一〇代から五〇代の男女で既婚未婚は問わず、二九名の結果がとれた。正月の初詣で長蛇の列ができたという状況での質問である。

まず、東京大神宮を知っているかという質問に対しては二九名中一〇名が知っているということだった。このうち首都圏在住に限ると一三名中八名となり、そのなかで女性に限ると八名中六名に達することとなった。知らなか

った女性は一人が既婚者で、もう一人は未婚者であるが京都より引越して来た直後であった。東海地方在住者では八名中知っていたのは未婚女性の二名のみで他の四名の未婚女性は知らなかった。男性は二名とも知らなかった。次に、東京大神宮へ参拝したことがあるかという質問には二三名中六名のみが参拝経験者で全員が女性であった。首都圏が五名、東海は一名であった。京都と福岡の八名の女性はその名前も知らなかった。

このことから首都圏在住の既婚未婚を問わない三〇〜四〇代の女性には知名度が圧倒的に高い様子がわかる。これに対して男性にはほぼ知られていない。彼女達をして東京大神宮を流行神に成さしめているのではないか。これは前述のO氏の言葉からも確認できる。「私が東京大神宮を知ったのは二一世紀になってから。雑誌『an・an』（以下『アンアン』と表記する。注・筆者挿入）を見てです。この雑誌は半年に一度（くらい）占い特集があるので、毎回大神宮は載ってる気がする。」⁽⁴¹⁾というものである。筆者の知人でブライダルコンサルタントの谷川氏によると、『アンアン』の狙っている購買者層は二〇代。ただし特集内容いかんによつてはそのまま広がっている。最近はまだ「この層」という狙いはせずに、企画毎にターゲットを変えている。スピリチュアル特集の時は部数が増加する。」⁽⁴²⁾と話す。このことからO氏のいう占い特集すなわちスピリチュアル特集の時は購買者が増加しその増加している部分は東京大神宮に群参する彼女達、「女子」であると考えられる。

この層の「女子」は「アラサー」であり、あるいは「アラフォー」である。彼女達は「婚活」をしている世代であり、異性を積極的に求める「肉食系」なのである、というキーワードを使用し表現されることの多い女性達である。⁽⁴³⁾この積極的に婚活しているはずの女子が良縁を希求して東京大神宮に群参しているのである。

第三節 女子達の祈願／絵馬から見えるもの

本節ではこの群参する女子達の参拜行動を絵馬から検討する。前節では東京大神宮に群参している女性の多くは

積極的に婚活をしているはずのアラサー、アラフォーの女子が大勢を占めているのではないかと状況が確認できた。彼女達はまず拝殿に詣でてカミに祈願した後、お守りを購入する。中には絵馬を書いて奉納する女子もいる。東京大神宮にも境内には絵馬が鈴なりであった。ただ東京大神宮では絵馬は「願い事」が書かれている面がすべて見えないようになっており、その内容を視認することは不可能であった。そこで、第二章で事例とした三つの神社と京都市内で縁結びに利生があるとされる東山区の地主神社と北区の今宮神社、上京区の幸神社、下京区の道祖神社の絵馬をランダムに写真撮影し、そこから読み取れた願い事をピックアップした。今回は縁結び関係の絵馬のみを選び他の祈願はカウントしていない。母数は七〇である。

読み取れた「願い事」を一覧にしたものが【表2】である。全体の七一％が女性が認めたものであり、一九％がカップルでの記入、一〇％が男性であった。また、全体の四七％がまだ見ぬ異性との良縁を祈願する内容で、次いでカップル同士の「恋愛の持続」、そして「片思い成就」、「復縁」という順で続いている。

上記のような結果から考察すると、良縁成就を祈願しているのは現在恋人や婚約者のいない女性がまだ見ぬ恋人と出会うためであり、その一念を籠めて絵馬を奉納している確率が圧倒的に高いことになる。内容に関しては、女性の絵馬には「理想の男性と出会う」や「私を大切にしてくれる男性と出会う」が多く、中には「やさしい海上自衛隊員で顔は普通の九州男児」や「背が高くて婿養子オツケーな人」というような非常に具体的なケースも見られた。

神社別の傾向として、地主神社ではカップルでの記入やカップルの女性が彼に対する気持ちを記入しているケースも多い。他の神社はパートナーのいない人の記入がほとんどである。出雲大神宮では「仕事」との両立が見られる絵馬が複数あり、今宮神社ではアニメキャラクターのような彼女が欲しいという男性の記入が複数見られた。⁽⁴⁾ 今宮神社では他の神社に比して男性の奉納が多く見受けられた。

42	ずっと幸せ	ずっと一緒	w f	地主	カップル単独
43	大好きなダーリンとずっとなかよしで		w f	地主	カップル単独
44	結婚しておじいちゃん・おばあちゃんになっても		w	地主	カップル8
45	これからもうずーと	色んなこと共感しよう	w	地主	カップル9
46	今が一番幸せです	支えてくれてありがとう	w	地主	カップル10
47	(男8人がそれぞれ良縁祈願)		M	地主	不特定21
48	海上自衛隊でやさしくて顔は普通	九州男児ならなおよし	F	地主	不特定22
49	x xさんと仲直り		F	地主	復縁3
50	三十路前に必ず結婚	富井さんと素敵な関係を	F	地主	片思い9
51	結婚して元気で明るい子が授かるように	その子の自慢の親になれるように	w	地主	子受け
52	この恋が一生続くように		w	地主	カップル11
53	理想の男性と巡りあい寿退社	その姿を両親が健康に見続けられるように	F	今宮	不特定23
54	唯のような彼女ができるように		M	今宮	不特定24
55	x x君の彼女になれますように		F	今宮	片思い10
56	ムギちゃんみたいなかawaii三次元の彼女ができるように		M	今宮	不特定25
57	ふうちゃんのように素敵なパートナーと結婚できますように		F	今宮	不特定26
58	皆が祝福してくれる理想のタイプと結婚できるように		F	今宮	不特定27
59	今年中に縁談がありますように	結婚できますように	M	今宮	不特定28
60	平沢唯姉妹のような娘と出会えますように		M	今宮	不特定29
61	普通に結婚できて子供ができますように		M	今宮	不特定30
62	一緒にずっと手をつないで	幸福をつかみたい	F	道祖	不特定31
63	丸山x xさんにいつか想いが届きますように		F	道祖	片思い11
64	好きな人とずっと一緒に		w f	道祖	カップル単独
65	今年結婚		w	道祖	カップル12
66	子供達が幸せな結婚ができますように		F	道祖	親の思い
67	今年こそ良縁の方と結婚できますように		F	道祖	不特定32
68	おひとりさまのしいケドそろそろ卒業したい		F	道祖	不特定33
69	智美が英樹のところへ戻ってきますよう	今年の終わりには一緒に	M	道祖	復縁4
70	x xと一生仲良くできますように		M	道祖	片思い12

【男女の記載例】

M＝男性 F＝女性 w＝カップル w f＝カップルのうち女性が記入

【内容の記載例】

不特定＝意中の異性は特にいない、もしくは判明していないが、良縁を祈願するもの。

片思い＝ある特定の異性への思いが籠められているもの。

感謝＝縁のあったカミへの感謝。

復縁＝復縁を願うもの。

親の思い＝親が子供の良縁を願うもの。

カップル＝カップルが二人の名を書いて将来を願う、あるいは誓ったもの。

カップル単独＝カップルが自分の名前だけを書いて将来を願う、あるいは誓ったもの。

子受け＝カップルが結婚してからの子受け。結婚間近もしくは新婚かと思われる。

【表2】絵馬

番号	祈願1	祈願2	男女	神社	内容
1	相手とめぐり合う	幸せに毎日過ごす	F	出雲	不特定1
2	仕事で成功	結婚・出産	F	出雲	不特定2
3	ふさわしい人と出会う	出雲大神宮で結婚式	F	出雲	不特定3
4	人生のパートナー	仕事	F	出雲	不特定4
5	すてきな異性にめぐりあえるように		F	幸	不特定5
6	できるだけはやく良縁		F	幸	不特定6
7	大スキな人と幸せに	浮気NG	F	今戸	片思い1
8	素敵な彼ができ	幸せであたたかい家庭	F	今戸	不特定7
9	カズマサとよりが戻るように		F	今戸	復縁1
10	大好きな人と結婚	あったかい家庭	F	今戸	片思い?2
11	結婚・子供・幸せな家庭	ムコ養子にきてくれる背の高い男性	F	今戸	不特定8
12	大切にしてくれる人と出会う	早く結婚	F	気多	不特定9
13	努力し自分を磨く	友人にもよいご縁がありますように	F	気多	感謝
14	良縁に恵まれる		F	気多	不特定10
15	良縁が授かるとうに		F	気多	不特定11
16	二人が幸せにいられるように		w	気多	カップル1
17	まこちゃんと仲良く	好きになってくれるように	F	気多	片思い3
18	この思いが伝わるように		F	気多	片思い4
19	笑顔いっぱいの人	笑いの絶えない素敵な日々	F	気多	片思い5
20	5年、10年笑っているように	ゆーちゃんの仕事ができるように	w	気多	カップル2
21	自分を大切にしてくれる人と結ばれる		F	気多	不特定12
22	素敵な出会いが	末永く大切に思える人と出会う	F	気多	不特定13
23	あっちゃんとずっと幸せに一緒にいられるように		F	気多	カップル3
24	私も子供も全員が幸せになれる相手との結婚		F	気多	不特定14
25	大切な人がx xしませんように	ダイスケに気持ち伝わるように	F	気多	片思い6
26	ドキドキする素敵な恋ができるように	恋してカワイイ女になるように	F	気多	不特定15
27	素敵な理想の人と出会う	楽しい恋をして結ばれる	F	気多	不特定16
28	今年中に運命の人とめぐりあう	結婚できるように	F	気多	不特定17
29	大好きなあの人と一緒にになれるように		F	気多	片思い7
30	3人の娘の良縁		F	気多	親の思い
31	ずっと一緒に幸せで		w	気多	カップル4
32	良縁に恵まれて	早く結婚できるように	F	地主	不特定18
33	ずっと一緒にけんかのもりこえられるように	幸せが訪れるように	w f	地主	カップル単独
34	良い人に出会えるように		F	地主	不特定19
35	太郎さんが奥さんと離婚するように	私だけを愛して結婚	F	地主	片思い8
36	貴博くんと復縁	友達だけでなく私のことも考えて	F	地主	復縁2
37	大好きな人と京都へ来られて感謝		F	地主	感謝
38	みゆきとずっと一緒	ケンカも笑顔も	w	地主	カップル5
39	こーじとずっとなかよく	さきをこれからも	w	地主	カップル6
40	二人仲良く	いろいろな壁をのりこえて	w	地主	カップル7
41	良縁に恵まれて幸せな結婚	家族が平和で健康	F	地主	不特定20

このような傾向からみると、女子達は地主神社や今宮神社といった旧来から縁結びの利生を持つとされる神社には例え一度は参拝したとしても、知名度の高さからカップルや男性も参拝に来てしまうような神社においては自分のニーズとは合致しないと察知するのだろうか。女子達は彼女達個人のニーズに適合した環境を探索し、カミと対峙できる神社を選択しているのではないだろうか。

以上、本章の考察からは、神社側の新趣向と身近な奇跡喧伝をメディアで「発見」した婚活に励む女子達が彼女達のニーズに合わせて参拝する神社を選択しているとみられると分析できよう。

第四章 流行神の示現

第一節 婚活の破綻危機

ではこうした一見メディアで言われるような積極的そうな女子達が何故神社へ群参し、そのカミが流行するぐらい祈願に熱心になるのだろうか。

拙論『流行りだす神仏―その構造と思想⁽⁴⁵⁾』において筆者は、外部からの激しい圧力で祈願構成体が日常生活の破綻の危機に曝された時に示現する外来のカミが流行神化するという論考を進めた。この論旨を当てはめるならば、この場合の祈願構成体とはすなわち「群参する女子達」であり、日常生活破綻の危機とは「結婚できないかもしれないという思い」であろう。外部からの激しい圧力とは「晩婚化、非婚化」、「所得低下や労働時間の長期化」との考察も可能ではないだろうか。これらの圧力要因はバブル経済崩壊や近年の世界同時株安やリーマンショック等による日本の景気の低迷がその一因と考えられる。

インターネットリサーチの会社である株式会社マクロミルが平成二一（二〇〇九）年に発表した『「独身男女一〇〇〇人調査」結婚意識と婚活に関する調査⁽⁴⁶⁾』によると、「不景気による結婚意向の変化」という項目においては

女性の二七％が不景気といわれる中、結婚意識が高まったと答えている。しかし、「結婚に対する考え方」という項目では女性の実に八六％が結婚しても生活レベルは落としたいと答え、かつ八一％が結婚に重要なのは経済力であると答えている。これに対し、男性の四六％が自分の将来が不安で結婚を考える余裕はないと答えている。この結果は「婚活女子」達の望むような結婚は困難であるという結論を導き出さざるを得ないのではなからうか。

次に株式会社電通が平成二二（二〇一〇）年に『イマドキ独身女子の結婚観と恋愛の実態』と題した調査結果を報告している。^{④7}

その中で「イマドキ独身女子の恋愛実態」という項目で、付き合っている彼氏がいると答えたのは三〇％であった。つまり恋人がいない女子が七〇％にも上るのである。また、彼氏がいないと答えた女子のおよそ半数にあたる三五％が三年以上いない状態で、「これまで異性とお付き合いしたことがないという一五・二％を加えると、まさに独身女子の半数以上が三年以上、異性と付き合っていないという実態が明らかになった。」^{④8}

「イマドキ独身女子の結婚観」という項目ではかつての結婚三大条件である「三高」が揃って二五位以下の下位にあり、「仕事や収入が安定している」ことが八位と上位にある。上位の四項はいずれも六〇％以上の支持を得ており、上から「信頼できる」、「価値観が近い」、「安心できる」、「一緒にいて楽」である。これを電通総研は「結婚後の生活で不安を抱えたくないという思いの表れと結婚前の生活とのギャップを少なくしたい意向が垣間見える。」とコメントしている。

「日頃のストレス実感の有無」という項目では独身女子の七一％がストレスを感じると答えており、その理由のトップが「将来不安」である。ストレスを感じる割合の八割以上が将来の不安であり、既婚女性の将来不安より二〇ポイント以上高くなっている。先述のマクロミルのアンケート中の不景気のなかの結婚願望の高まりという結果からみても、結婚というのは「安心できる居場所になっている」^{⑤0}のである。

こうした結果に「婚活」という言葉を創出した白河桃子はこの電通アンケートでの分析として、「婚活の限界値」は見えている。「養つてほしい」と願う女性に対して「養える」または「養う気がある」男性の数が少なすぎるのだ。(中略) いまどきの独身女子たちは(中略) 不安な現代だからこそ、『安心な自分だけの居場所』を確保したいと思っただけなのだ。⁽⁵¹⁾とし、「コミュニケーションが活発でネットワークを持つ人しか恋人ができない時代といえる。家と会社を往復しているだけで、恋愛も結婚もできたのは八〇年代までなのだ。」⁽⁵²⁾と述べている。

そして結婚相談の会社、株式会社ツヴァイが平成二二年に発表した「結婚に対する意識⁽⁵³⁾」というアンケートでは、未婚男女の八一%が「自分は一生独身かも」と思うことはありますか。」という項目に「はい」と答えている。

婚活を提唱した白河でさえ「婚活の限界値は見えている。」という中、実は彼氏がない人が七割という女子は将来に不安を抱え、「自分は一生独身かも」と考えているような実態がこれから解析できた。婚活ブームとメディアで呼ばれてはいるものの実際にコミュニケーションが活発でない現状も白河の発言からも窺えるのである。

こうした要因が外部からの圧力となつて、祈願構成体たる婚活女子達を圧迫し、その危機を回避あるいは破綻してしまつた彼女達の願いを回復させるために流行神が示現したということが考えられる。婚活をメディアに煽動されているものの、実際には活動をしない、できない状況下であり、その思いが神仏への縁結び成就という行動に結びついているのではなからうか。

第二節 結べない縁

平成一七(二〇〇五)年には恋愛結婚が八七%を越え、見合い結婚は六%に過ぎない。両者が逆転したのは昭和四〇年代半ばであり、以後両者の差は開く一方である。前節からの言い回しを使えば、「イマドキの」若者は恋愛結婚が当たり前であり、見合いはマイノリティな立場においやられている。

見合いは親、親戚からの紹介という形式に過ぎないのであるが、筆者が二〇代の頃はこの「見合い話」に自身が何回か遭遇したことがある。ただ、背後にある親や親戚達の圧力が嫌で「見合い」そのものを断ってしまった。それと共にバブル前後で見合いというものは、友人間でも恋愛に比べブライオリティが低かった雰囲気醸成されていたのも嫌だった原因であろう。つまり、平成一桁年代に若者だった当時は結婚に至る男女間の付き合いには両親、親戚は介在しない、という空気があった。筆者自身は未婚であるが、それでも結婚はできるといふ雰囲気だったのである。そして当時の流行語として「結婚しないかもしれない症候群」という言葉があった。おそらく女性からみて自発的に「結婚できる可能性は高いけれど、あえて結婚しないかもしれない」というニュアンスであった。結婚しないという選択は当時、不幸ではない選択であったであろう。

また民俗学のこれまでの知識の集積、研究の成果によってイエやムラを中心とした恋愛慣行や婚姻のあり方が論じられている。そこにはイエやムラといった共同体規制のなかでの恋愛や婚姻があり、人々はそれを受け入れてきた。服部誠はそうした研究をふまえ「女子の社会・経済的地位の向上と低成長時代への移行は、新しい結婚・家庭像を生み出すことにつながってゆく。近年の非婚化、晩婚化現象はその前ぶれである。」⁽⁵⁴⁾と述べる。さらに彼は山田昌弘の研究を引用し、「地位を高めてきた女子にとって上昇婚をかなえてくれる相手が少なくなったこと、そして雇用の流動化で地位を低下させた男子にとって、今までどおり結婚相手を下位から求めようとしてもふさわしい相手にめぐり会うのが難しくなった」⁽⁵⁵⁾としてこうした相手を互いに求める限り、「非婚化、晩婚化は続く」と（山田は、注・筆者挿入）いうのであるが結婚相手に関するこれらの要求は、家制度が培った規範である。一度形成された規範はなかなかなくなるものではない⁽⁵⁶⁾と述べる。

これは前節のマクロミルの報告の女子の「不景気なので結婚したい意識は高まったが、生活のレベルは落としたくない。」、男性の「将来が不安で結婚を考えられない」という意見とも重ね合わせることができるのではないだろう。

うか。

「無縁社会⁽⁹⁷⁾」という言葉が近頃メディアで盛んに言われ始めている。この場合は孤独に死んでゆく身寄りの無い老人が死してなお誰にも引き取ってもらえないような状況を語る言葉として使われている。しかし、実は家族を作る縁をも結べない若年層男女が大量に存在しているのではなからうか。この実態もある種の「無縁社会」と呼んで差し支えなからう。極論的なイメージではあるが、核家族化が極端に進行し、いわゆる「隣りの世話焼きババア」や「釣書を持つてくる叔母」が消え、男性が徹夜で働き「社内恋愛」も消え、まさに異性と出会うチャンスは皆無に等しい状態では、「女子会」しかないのではなからうか。男子も同様であろう。見合い話もあるうちが華だったのである。

服部のいう新しい結婚・家庭像の創出という鳴動のなかで、彼女達はそのジレンマに陥っているのではないか。絵馬によく書かれている言葉に「理想の人に」という文言が多いのだが、その理想と現実のギャップは本人が一番自覚しているのではないだろうか。もはや服部や山田のいう上昇婚というのは望むべくもなく、本人もそれは理解しているのだが、心情的にはあきらめきれない思いが「理想の人」の出現をカミに祈るということになるのではないか。

こうした状況下において祈願構成体としての彼女達がその力を必要とし、その示現として東京大神宮が祀り上げられているのではないだろうか。

むすび

東京大神宮では三つある賽銭箱の一番左で祈願すると「効く」らしいとの噂もあるようだ。より効く神社を目指して女子達は情報を得たり、発信したりを繰り返して各地へ詣でている。この群参する女子達には一見積極的で激

しいイメージがある。事実、東京大神宮では正月やバレンタインの寒い時期や夏休みの炎天下、良縁を求め長蛇の列ができ、お参りの後はおみくじをひき、何種類もあるお守りを購入し、絵馬を奉納する。それぞれに行列ができるのだが、彼女達はおかまいなしで長時間待っているのである。

今戸神社では招き猫を写メでとり、招き猫体操の実演ビデオに爆笑する。気多大社では拝観順序を変更するほど参拝者が押し寄せ、ホームページには五万を越える恋バナ（恋愛に関する話）が集まる。出雲大神宮では磐座にしがみついたり、削ったりして付近を立ち入り禁止にしてみたりとパワフルで「肉食系」な様相をみせる。

絵馬をとつても大変具体的なのが満載されているもあり、こうした行爲を見るにつけ、「えんむすび」というよりは「縁の鷲掴み」という印象をうけるのである。こうした行爲は利生の即効性を願つてのことであろう。しかしながら、お百度を踏むであるとか、水垢離であるとかあるいは恋敵の藁人形に五寸釘を打つ、あるいは断ち物をするといった行爲は取材中一度も目にしてはいない。参拝から成就に至るまでの煩雑な手続きは省略されているのである。必要な利生がそこに行くだけで簡単に入手するという、利生をコンビニエンスストアで購入するかのような状況が進行しているのではないか。効率優先という現代の日本人の経済観念が民間信仰においても顕著になってきたとも受け止められる。それでも女子達は彼女達なりに真摯に取り組んでいるのもまた事実なのである。

このような現代の参拝行爲も最低限の規制によつて徐々に好転させようと神社側も好意的に受けとめており、参拝者が行列に疲弊しないよう東京大神宮では夏にミストシャワーを設置し、赤福をふるまう。また、「参拝のしおり」等で女子達の教導もおこたつていない。そこには経済的な理由によるこの流行の持続を願う神社側の運営戦略もある。流行神は祀り上げられた後は祀り棄てられることで祈願構成体の危機回避を行う、あるいは機能回復を図るということからすれば、流行が終焉をみてこそこの流行神なのではあるが、神社側からすれば永続のために手を尽くすのである。これは歴史的にみても山科妙見の例を引き合いにしてもわかることである。

女子達に話を戻すと、パワフルな印象を持つ彼女達ではあるが、しかし現実とのギャップを感じている様子も窺えるのである。不景気を理由付けとして結婚意識が高まっているものの、男性の相対的な地位の低下によって、男性の結婚に対する意識が以前より低下するなか、結婚しても生活水準は下げたくないという意識が女子のなかにあり、それは上昇婚を望むそれまでの女性の結婚観と同様であるために、彼女達の相対的な地位が上昇してしまつた現在においては現実的ではない。彼女達も実はそれを理解してはいるもののなかなか受け入れることができない。いずれにしても将来への不安は払拭できず、安心できる自分だけの居場所を結婚によって確保したいがために婚活を行い、少しでも「理想」を目指す、それがより未婚化を促進するというスパイラル的なジレンマに陥っているのではないだろうか。

よつてそのジレンマを一生独身でいるかもしれない不安という危機を回避すべく女子達祈願構成体は願ひ、そこに東京大神宮をはじめとする各地に流行神が示現するのであらう。

この件で調査を始めた当初は「肉食系」の「アラサー、アラフォー」の「女子」が「婚活」成就のために訪れる「パワースポット」というようなイメージを抱いていたのである。しかし、そのような面が垣間見えながらも実は懸命に祈願しつつ、そこに癒しすら求める婚活に疲れた女子達の救済機関ともなっているといつても過言ではない流行神が浮かび上がるのである。

二一世紀初頭、突如流行した「えんむすび」のカミは東京大神宮をその象徴として、男女間の相対的地位の縮小による恋愛観、結婚観のギャップを埋めたいとの女性側からの要請を受諾して展開されていると考えられるのではないだろうか。

註

- (1) 東京大神宮のパンフレットより(平成二二年使用分)
- (2) 三浦譲編纂発行、昭和五二(一九七七)年
- (3) 註(2)の三一四、三一五頁。
- (4) 註(1)に同じ。
- (5) 註(2)の三一五頁。
- (6) 編集・発行京都女子大学・京都女子短期大学部図書館
- (7) 註(6)の一六頁。
- (8) 註(6)の一六頁。
- (9) 神体の前で婚姻の儀礼をおこなった例としては明治八(一八七五)年五月二日に現在の岐阜県でおこなわれた婚姻が記録として残されており、これが日本で最初の神前式といえる。(八木透「婚姻儀礼の変遷と現代」)
- (10) 註(6)の一六頁。
- (11) 註(6)の一六頁。
- (12) 岩波文庫版『古事記』倉野憲司校注を参照した。一九六三年岩波書店発行である。
- (13) 註(12)の二一四頁。
- (14) 註(12)の二一四頁。
- (15) 蘭田稔、茂木栄監修、学研、一九九七年発行。
- (16) 註(15)の三一頁。
- (17) 註(15)の三三頁。
- (18) 平成二二(二〇一〇)年一月三日に参拝した東京出身の四〇代既婚女性Hさんの話による。
- (19) 由緒書にはこの名で記されており、『日本書紀』を参考にしていると思われる。『古事記』では伊邪那岐命と
- (20) 註(19)に同じ。『古事記』では伊邪那美命とされている。
- (21) 平成二二(二〇一〇)年一月六日、今戸焼の窯元での取材による。
- (22) 註(21)と同じ。
- (23) 一月一六日のOさんとのやりとりのなかでの発言。
- (24) 『全国神社名鑑(上巻)』による。
- (25) 気多大社の由緒書によると『万葉集』が文献初出である。
- (26) これは由緒書をはじめ、境内や神社入口にも大書してある。
- (27) <http://www.keta.jp>
- (28) 出雲大神宮発行のパンフレットの記載による。
- (29) 『全国神社名鑑(下巻)』による。
- (30) 『全国神社名鑑(下巻)』六五頁に「神域全体は考古学上、弥生式後期の古代祭祀の遺物包含層をなしている。」とある。
- (31) 註(28)に同じ。
- (32) 同協会相見氏の談。
- (33) 京阪神エルマガジン社発行の関西圏ターゲットの女性誌。
- (34) 『サバイ』六月号一三頁。
- (35) 片岡氏によると平成二〇(二〇〇八)年四月に第一回を挙行し、半年あけて二回目、翌年四月からは毎月挙行している祭祀である。

(36) 註(34)に同じ。一三頁。一二頁にも「この神主さんも良縁があったんだって。恋活中の人はぜひこちらへ……」とある。

(37) 平成二二(二〇一〇)年あたりになって社寺やその境内にある井戸や石等が対象となってきたようであるが、平成二〇(二〇〇八)年においてはフジテレビの番組のパワースポットランキングでは伊勢神宮や出雲大社を抑えて沖縄の水族館が一位を獲得していた。また、札幌の時計台や鳥取砂丘などが上位にランキングされていた。

このように単語として大変便利に使用されているだけで定義も甚だ曖昧であり、本質的な議論もなされておらず、学術的な認知は受けているとは言いがたい状況であるので、語彙としての紹介、あるいは状態の説明程度の使用に止め、現時点では安易に学術用語としては使用すべきではないと考える。

(38) 片岡氏の談による。

(39) 東京の知人男性K氏が女性の友人の話として教えてくれたもの。

(40) 平成二二(二〇一〇)年一二月に発表された「新語・流行語大賞」にも「女子会」なる言葉がランクインしている。既婚、未婚を問わず二〇〇四〇代の女性が彼女達だけで飲み会をすることをいうものでアラサー、アラフォー女性の間では頻出する語である。筆者の職場のこの年代の女性達も自らをこの言葉で呼んでいる。

(41) 註(23)に同じ。

(42) 平成二二(二〇一〇)一〇月に広告代理店や雑誌社と

懇意にされている谷川氏が筆者の意を受けて都内で某代理店営業と他誌編集者から聞いていただいた話を要約したもの。

(43) これら「」で括った語彙、言葉群は原作者の本来の意図とは違った意味で語られている可能性は否定できない。しかし、マスメディア等を通じて喧伝され、広まってしまったと思われる語義において作文したと考えていただきたい。

(44) これは男性に人気のアニメにおいて今宮神社をモデルにした神社が登場することで、そのアニメの聖地とされてしまっていることと関係していると思われる。

(45) 『京都民俗』第二七号 六七〜六九頁。

(46) このアンケート調査は平成二二(二〇〇九)年二月二四日に発表されている。二五〜四九才の首都圏の独身男女一〇〇〇〇が母数である。

(47) 電通総研が全国二三〜四九才の独身男女を対象にした「電通『独身』意識調査」(母数一九九六)と「電通『独身』実態調査」(母数二一四五)から分析したもの。前者は平成二二年二月に実施され、後者は同年九月に実施された。データ公表は同年一月二日に発表された。

(48) 註(47)のコメント。

(49) 註(48)に同じ。

(50) 註(47)に同じ。

(51) 註(47)に監修している白河桃子による分析。

(52) 註(51)に同じ。

(53) このアンケートの母数は五〇〇、対象は三〇代の未婚

男女である。平成二年八月五日に発表された。

- (54) 『日本の民俗7 男と女の民俗誌』、『III 恋愛・結婚・家庭』、二七七～二七八頁。

【参考文献】

京都女子大学・京都女子大学短期大学部図書館

『儀礼文化「婚礼物語」―家の慶びから個人の悲しみまで―』二〇一〇年

三浦 譲 『全国神社名鑑へ上巻』及び『同〈下巻〉』全国神社名鑑刊行会史学センター 一九七七年

倉野憲司校注『岩波文庫 古事記』岩波書店 一九六三年
藺田 稔 茂木栄監修『日本の神々の事典 神道祭祀と八百
万の神々』学研 一九九七年

『SAVVY』(二〇一〇年六月号) 京阪神エルマガジン社
二〇一〇年

『CREA』(二〇一〇年三月号) 文芸春秋 二〇一〇年
『〓独身男女二〇〇〇人調査〓結婚意識と婚活に関する調

- (55) 註(54)に同じ。二七八頁。

- (56) 註(54)に同じ。二七八頁。

(57) 「無縁社会」とは平成二二(二〇一〇)年一月三十一日にNHKが番組「NHKスペシャル」で放送した際のサブタイトルであり、その後出版された同名の書籍のなかで取材スタッフが造った「造語」とであると述べている。
ただ平成八(一九九六)年出版の書籍に同様の単語も見受けられることから、まったくの新語ということではなく、彼らが彼らの意図する思想を表現するための「造語」と捉えるべきであろう。

査『マクロミル 二〇〇九年

『イマドキ独身女子の結婚観と恋愛の実態』電通 二〇一〇年

『結婚に対する意識徹底調査』ツヴァイ 二〇一〇年
主婦の友社編『主婦の友実用シリーズ 結婚とマナー』主婦の友社 一九六九年

八木 透、山崎祐子、服部 誠 『日本の民俗7 男と女の民俗誌』吉川弘文館 二〇〇八年

八木 透 『婚姻と家族の民俗的構造』吉川弘文館 二〇〇一年

八木 透 「婚姻儀礼の変遷と現代」、『明治聖徳記念学会紀要(復刊第三十七号)』明治聖徳記念学会 二〇〇三年
神島二郎 『日本人の結婚観』講談社 一九七七年

宮田 登 『宮田登日本を語る3 はやり神と民衆宗教』 吉

川弘文館 二〇〇六年

宮田 登 『近世の流行神』 評論社 一九七二年

村田典生 「京都市における神社伝承の変遷―中京区、御金

神社を中心に―」、『京都民俗第24号』 京都民俗学会 二〇

〇七年

村田典生 『現代の流行神と社寺伝承―金運をめぐる民間信

仰を事例として―』 筆者修士論文 二〇〇九年

村田典生 「流行りだす神仏―その構造と思想―」 『京都民俗

第27号』 京都民俗学会 二〇一〇年

NHK 「無縁社会プロジェクト」 取材班編著 『無縁社会

「無縁死」 三万二千人の衝撃』 文芸春秋 二〇一〇年